

お茶の水女子大学リベラルアーツとFD公開シンポジウム

平成 21 年 2 月 12 日 (木)

文理融合リベラルアーツ科目を担当して

—担当教員によるパネル討議—

舞踊における色・音・香(「色・音・香」系列から)

パネラー 中村 美奈子(人間文化創成科学研究科 文化科学系准教授)

色・音・香系列の担当をしました中村美奈子と申します。「舞踊における色・音・香」の授業の報告をさせていただきたいと思います。

今日の発表では、サブタイトルで「実演授業」ということが取り上げてありましたので、その部分を中心にお話します。ビデオが 15 分ほどありますので、そちらをご覧に入れながらお話を進めてまいります。

最初に、私は「基礎ゼミⅠ」という前期開講の授業を 6 年間担当しております。昨年度の 2 月頃に、来年度は後期にもう一コマやってくれと言われてました。芸術Ⅰは音楽表現コースの開講科目でして、舞踊教育学コースの基礎講義科目ではありません。ということで、「基礎ゼミⅠ」とあまり内容が重ならないように新しい授業を組まなくてはいけなくなりました。いろいろと考えた末、自分が関心を持っていることを少しずつ紹介してみようと思い、結果として「一人オムニバス」のような授業となりました。

授業の基本方針として、第一に「生の実演」をできるだけ取り入れることにしました。これは「基礎ゼミⅠ」の方でも何回かやったところ、割と評判がよかったからです。FDの予算で講演謝金が出るということがわかりましたので、実演者を招聘して行う授業を数回取り入れました。

そして第二に、「文化的に多様な身体表現を紹介する」ということに重きを置きました。先ほどの学生さんの発表の中では、好意的にとらえてくれていたので安心しましたが、ひとつのことを掘り下げるのではなく、多種多様なものを紹介するという方に重きを置くような感じにいたしました。

さきほど申し上げたように、元となる基礎教育科目がなかったのが、学生さんの指摘にもあったように、テーマとしての、「色・音・香」にこだわりすぎたかもしれません。しかし、私としては、基礎教育科目の代わりに「文理融合」とか「学際性」というキーワードをサブテーマとして加えて授業を組んだつもりです。

授業の概要は、パワーポイントのとおりです。最初に、私の専門分野でありますバリ島の舞踊について話しまして、それから韓国の舞踊と朝鮮の舞踊を比較するような形で紹介しました。「朝鮮」の方は、先ほどの学生の発表の中に出てきましたが、金剛山舞踊団という在日朝鮮人のプロの舞踊団の方を招聘して実演していただきました。

パワーポイントの 6 番と 7 番(「文理融合」)をテーマとしております。また、8 番の能についても、私の大学の先輩でもある、宝生流の能楽師である佐野登先生に来て実演していただきました。

学生の受講状況ですが、前期に行われた「受講希望調査」では、40 人ぐらいが受講を希望しているという結果が出ておりましたので、ちょっと安心していましたが、後期のガイダンスには 80 人ぐらい集まりまして、教室を変更しました。登録者は、名簿上では 100 人以上いるのですが、実際に出席しているのは 60 人程度です。実際に単位を取りたい人がどれだけのいるのかについては、レポート待ちというところですが、

バリ舞踊における色・音・香り1



- 色: 白と黒の格子の布→白魔術(善)と黒魔術(悪)を象徴している
- パロン(聖獣)とランダ(魔女)の映像→善と悪の永遠の戦い=バリの世界観
- 「ケチャ」の映像
- 音: 民族楽器ガムランの楽器の調律について紹介。「うなり」を聴く



本日の発表の流れ

- ・ 授業方針
- ・ 授業概要
- ・ 学生の受講状況
- ・ 各回の授業概要の紹介(時間の都合により一部説明を省略する場合があります)
- ・ 実演授業の授業内容の映像による紹介
朝鮮舞踊(約6分)、能(約10分)
- ・ 実演授業の問題点と今後の課題
- ・ 2010年度の実演授業の授業案

はじめに

- ・ 筆者は本年度前期に「基礎ゼミⅠ」(演習)担当している(6年間継続)。
- ・ 「芸術Ⅰ」は、音楽表現コースの開講科目であるため、舞踊教育学コースのほうには対応する基礎講義科目がない。
- ↓
- ・ 基礎ゼミⅠと内容があまり重複しない形で、新しい授業を考える必要がある。
- ↓
- ・ 私が現在関心のある舞踊に関連したテーマでの「一人オムニバス」(1回ずつ完結した授業形式)を行い学生の動向を探る。(9月30日にシラバスを大幅改稿)

授業方針について

- ・ 「生の実演」を取り入れる(→基礎ゼミⅠでも試行)実演者を招聘し、舞踊の「生の実演」をできるだけ多く授業に取り入れるよう工夫した。(筆者自身による衣装の着付けの回を含めて合計4回行った)
- ・ 院生に授業経験の機会を与える
- ・ ゼミ所属の大学院生、および元ゼミ生(卒業生)の協力体制のもとに行なった。
- ・ 多様な身体表現を紹介する
- ・ 一つの舞踊を深く掘り下げるよりは、むしろ多くの多様な身体表現(舞踊)に接する機会を与えることに重きを置く
- ・ 文理融合、学際性をサブテーマとする

授業概要

1. ガイダンス
2. バリ舞踊における色・音・香1
3. バリ舞踊における色・音・香2(*舞踊衣装の着付け実演)
4. 韓国舞踊における色・音・香(*舞踊実演)
5. 朝鮮舞踊における色・音・香(*舞踊実演)
6. 舞踊とエンターテインメント(色・音・香をキーワードにして)
7. 舞踊とコンピュータ:文理融合型の舞踊研究
8. 能における色・音・香り(*舞踊実演、衣装を着付け実演)
9. バレエにおける色・音・香→LA図書を紹介
10. 西アフリカ(マリ共和国)の舞踊における色・音・香(*アフリカの現在の映像)
11. ルドルフ・ラバンとラバナーション:舞踊の記譜法→LA図書を紹介
12. 舞踊表現の多様性:舞踊(Butoh)とバレエの身体表現の比較考察を通して

学生の受講状況

- ・ 当初の予想(40人くらい)を大幅に上回る人数(80人以上)が、ガイダンスに集まった→大学本館306教室へ教室変更
- ・ 登録者数(10月時点の名簿)は、100人以上いたが、1回目、2回目の出席者が約70人程度、以降少しずつ減って、60人程度で落ち着いた。
- ・ 出席の評価割合を70%にしており、毎回小レポート(感想文)を提出させて出席点としていたので、積極的な参加者とそうでない参加者がいることが分かった。
- ・ 舞踊(バレエなど)を習っている学生(舞踊教育学コース以外)でも何人かいることが分かった。

次に、各授業について、少しずつ内容を紹介していこうと思います。

初回の、バリ舞踊のところでは、「白と黒」に焦点を当てて、「色・音・香」のうちの「色」を扱いました。また、バリの舞踊では、「香(かおり)」すなわち「香(こう)」も重要な役割を果たします。トランスに入るときに香を吸いこむのです。それで、実際に教卓で香をたいてみました。

何か起こらないかとちょっと期待したのですが、私の気分が上がってしまっただけで、学生には影響はありませんでした。バリ舞踊の2回目では、「色」の観点から、舞踊の衣装や化粧についてお話をしました。衣装の実物を見てもらい、実際に私が衣装の着付けを行いながら、説明をしました。

韓国舞踊における色・音・香り (*舞踊実演)




- ・鄭恵珍さん(D2)による「太平舞」の実演
- ・韓国舞踊の衣装の紹介
- ・韓国の民族色:五方色
- ・黄・青・白・赤・黒の5種色を言う。陰陽五行思想を基礎にする。中央と四方を基本とし、黄は中央、青は東、白は西、赤は南、黒は北を意味する。

「太平舞」写真は、当日配布資料より抜粋(前日の実演着のものではありません。)

3回目の韓国舞踊については、私のゼミの留学生である鄭恵珍さん(本学博士後期課程2年)に、舞踊の実演も含めて韓国舞踊における「色」について話をしてもらいました。

4回目の「朝鮮」の舞踊については、さきほどお話しましたが、在日朝鮮人の方の舞踊団であります金剛山歌舞団の若手の踊り手の方に来ていただきました。これは、鄭さんが、授業をコーディネートしてくれたおかげで実現することができました。そのときの授業の様子を6分ほどの映像に編集しましたので、ちょっと見ていただきたいと思います。実際に踊りをやっていただいて、その後に質疑応答をしたのですが、映像は、その質疑応答の中の一部です。出演者は、ダンサーの方が4人と、振付家であるカン・スネさんです。踊りの中で特徴的だった、回転の部分を分析的に説明しながら実演を見せてくださいました。この映像では伝わらないかもしれませんが、生で見ると、かなり迫力があって、拍手がわきおこるなど好評でした。映像の中に入れて忘れてしまいましたが、舞踊教育学コースの受講学生3人に前に出てもらって、舞踊団の方と一緒に朝鮮舞踊の特徴的な舞踊の歩行動作をやってもらったりもしました。


舞踊とジェンダー
(色・音・香をキーワードにして)



- ・TAの竹田恵子さん(D2)に、自身の研究内容を「舞踊とジェンダー」として、授業の中で研究発表してもらい、筆者との対話形式で授業を進めた。
- ・ジェンダーに関する基礎的な内容、作品《白鳥の湖》のデュエット比較(男女のダンサーの関係性)を扱った。

この後、2回ほど文理融合と学際性をテーマに授業を行いました。「舞踊とジェンダー」では、主にクラシックバレエとコンテンポラリーダンスなどを事例として取り上げながら、作品の中で、男女の関係性がどのように描かれているか、作品によってどのように違うのかということを実際の映像で検証しました。「舞踊とコンピュータ」では、私が理系の研究者の方々と共に共同研究として行っているモーションキャプチャを使った舞踊の技の解析について、2005年の「国際日本学シンポジウム」で公開実験という形で行ったときの映像を見せながら紹介しました。

舞踊とコンピュータ:文理融合型の舞踊研究




- ・この回はLA科目の「文理融合」をテーマとした。
- ・筆者が行っている、民族(民俗)舞踊のモーションキャプチャによる舞踊のくわさくの解析について紹介した。
- ・上の写真は、2005年7月開催の第7回国際日本学シンポジウムにおいて筆者の企画した、リアルタイムモーションキャプチャ。下の写真は、同シンポジウムでの衣装をつけての実演。

「能における色・音・香」では、さきほど紹介しましたように、宝生流の能楽師である佐野登先生に来ていただきました。写真を見ていただくとわかりますが、一般教室でしたので、毎回、実演があるときは机を脇に寄せて実演スペースを作りました。この日は、すべての机を脇に寄せて、いすだけにして、授業を行いました。謡を一緒にやったり、楽器や仕舞の実演をしていただいたりもしましたが、「色」ということにこだわって、能装束の着付けを中心にしていただきました。やはり装束の美しさが学生の感想文の中でも一番指摘が多かったので、着付けの映像を見ながら説明していきます。

佐野氏は、講義の際にマイクを全然使っていないのですが、やはり舞台をやっているから、とても声が通ります。そのことも感想文の中で学生がよく指摘していました。こういった点もライブ授業のよいところだと思います。実際の着付けには20分ぐらいかかっているのですが、この映像は短く編集してあります。着付けが完成し、面(おもて)も付けてもらい、視界がいかかに制限されているか、またその状態で舞うことがいかに難しいかということを着付けてもらった本人が確認するとともに、ほかの学生らも理解します。また、どれくらいの角度に首を前傾させると泣いているように見えるのか、つまり、実際の顔の表情を使わない状態でいかに感情を表現できるのかということも合わせて検証しました。盛りだくさんの内容だったため、授業が延びてしまいました。しかし、授業が終わっていないにもかかわらず、何人かの人が途中で帰っていったという、非常に悲しいことが起こりました。最近の学生さんは忙しいからしかたがないのでしょうか?佐野先生にも苦言を呈されました。


あまり脈絡はないのですが、西洋の身体表現についてあまり扱っていなかったため、「バレエにおける色・音・香」では、ロマンティックバレエの名作と呼ばれる「ジゼル」を中心に、西洋の劇場舞踊について紹介しました。バレエについては「舞踊とジェンダー」でも少し紹介しましたが、今回は、踊りのテクニックの部分についても言及しました。また、ジゼル第2幕のウィリー(亡霊)たちの重力を感じさ

バリ舞踊における色・音・香り2
(*舞踊衣装の着付け実演)



- ・憑依舞踊「サンギャン・ドゥダリ」の映像鑑賞
- ・香り:教室内で、バリ式のお供えをしてバリの香を焚いた。香は憑依に至る手段として使われる
- ・宮廷舞踊「レゴン・ラッサム」の映像鑑賞
- ・色:レゴンの衣装の着付け実演(筆者が説明をしながら衣装を着る。あわせて、緑は高貴な人が着る色であるなど、衣装の「色」についての説明をする)。

朝鮮舞踊における色・音・香(*舞踊実演)



- ・韓国の舞踊との比較の観点から、在日朝鮮人の舞踊を紹介する。
- ・金剛山歌舞団の若手の振付家、庚秀奈(カン・スネ)氏率いる5人のプロの女性ダンサーの方々に茶大に来ていただき、今回の授業に至るいきさつなどの説明の後、チャング舞とチェンガン舞の実演。
- ・質疑応答では、回転の技法についての説明、学生への実技指導。
- ・庚氏は、これを交流の機会として好意的にとらえてくださり、交通費のみで来てくださった。(交通費分は、筆者の個人研究費にて手当てした)

チェンガンの舞
画像は舞踊団HPより

朝鮮舞踊における色・音・香の授業内容
(質疑応答の一部を編集、約6分)



能における色・音・香
(*舞踊実演、衣装着付け実演)



- ・佐野登氏(宝生流能楽師)による謡、仕舞の実演
- ・正座は左足から
- ・楽器(小鼓、笛)の体験
- ・「羽衣」の衣装の着付け体験
- ・どのようにすれば泣いているように見えるのか?
- ・舞台上の花の香りを想像する(させる)
- ・LAの経費により講師謝金を手当てしていただきました

能における色・音・香の授業内容
(衣装の着付けを中心に編集、約10分)



せないジャンプやリフトの技巧については、LA図書の『やさしいダンスの物理学』にも解説が載っていることを紹介しました。

西アフリカ(マリ共和国)の舞踊における色・音・香(*アフリカの現在)



ゼミの卒業生、山口由香さんが、青年海外協力隊として西アフリカのベナン共和国に2年間滞在した後、2008年7月からマリ共和国日本大使館に「草の根 人間の安全保障無償資金協力 外部委嘱員」として勤務していることが分かり、現地での活動と地域の芸能を紹介するビデオを撮って送ってもらった。

マリの音楽と舞踊について研究を行っているゼミ生の上野千佳子さん(M1)に解説をお願いし、映像を見ながら、筆者と対話する形式で授業を行った。

私の専門はアジア地域中心なので、アフリカには行ったことはないのですが、私のゼミの卒業生がJICAの青年協力隊として派遣されたのち、「西アフリカ(マリ共和国)」に住み着いているということがわかり、彼女に現地の舞踊の映像を撮影して送ってもらうことにより、アフリカの舞踊(身体表現)についても一部扱うことができました。また、ちょうどよく、同地域の研究をしている院生がゼミにおり、彼女の協力により授業を運営しました。


「ルドルフ・ラバンとラバノーテーション」では、私の研究している舞踊の記譜法を取り上げました。また、記譜システムを理解したかどうかを試すために、レポート課題1として、LA図書「[Labanotation]」の〇ページにある誤植を指摘せよという課題を出しました。

舞踊表現の多様性:舞踏(Butoh)とバレエの身体表現の比較考察を通して

- 本日の課題:二つ(舞踏とバレエ)のまったく志向性の異なる身体表現を観て感じたことを自由に論じなさい。
- 大駱駝艦(だいらくだかん):「海印の馬」(Sea Dappled Horse)より抜粋:(舞踊教育学コースの卒業生が出演している作品なので、教育用に特別にいただいた未刊行のDVD)を観て、「日本人固有の身体表現」と海外からも評価の高い舞踏(Butoh、暗黒舞踏)という身体表現を知る。
- クラシックバレエの世界でもトップレベルにいる日本人ダンサー(熊川哲也等)の身体表現を知る。

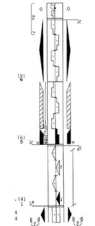
最終回は、日本人独自の身体表現として「舞踏(Butoh)」を取りあげてみましたが、かなり刺激的だったようでした。

バレエにおける色・音・香→LA図書の紹介



- ロマンティックバレエの傑作といわれる「ジゼル」を取り上げ、第1幕(生の世界)と第2幕(死の世界)をダンサーがいかに演じているか、映像を見せながら解説した。
- 第2幕のワイルド(亡霊)の体重を感じさせない身体表現技法についてもっと知りたい人はLA図書『やさしいダンスの物理学』を参照するよう紹介

ルドルフ・ラバンとラバノーテーション:舞踊の記譜法→LA図書の紹介



- ラバノーテーションは、ルドルフ・フォン・ラバンRudolf von Laban (1879-1958)により20世紀半ばに考案された。(彼は、舞踊に関する理論を多数考案し、振付家・ダンサーとしても活躍)
- レポート課題:LA図書の「Labanotation」第4版には初歩的な間違い(誤植)があります。指摘してください。

まとめの方に入りたいと思います。「実演授業」の、問題点と今後の課題として挙げられるのは、「一般教室の使いにくさ」です。今回は、一般教室でやりましたが、踊るには床が固い(身体を痛める可能性がある)とか、机を片付けなくてはいけないとか、非常に大変でした。また、後ろの席からはダンサーの足元が見づらいというようなことも学生から指摘されました。基礎ゼミI

のときは、実演の回は、体育館の方でやっていたのですが、できれば教室を変更してやった方がよいかもしいろと考えています。ただ、基礎ゼミよりは人数が多いので、その点が問題です。

実演授業の問題点と今後の課題

<一般教室の使いにくさ>

踊るには床が固い(コンクリート)。机を片付けて実演スペースをつくらしたり、元に戻したりする作業に非常に時間がかかる。後ろの席からダンサーの足元が見づらい。

↓

実演の回は、体育館などへ教室変更するほうがよいと思われる。(床にマットを敷いて座るなど)(時間割の調整が必要)

2009年度体育館改修が行われるに際して、照明機材の充実などを含め、舞踊やスポーツの練習場としてだけでなく、上演スペースとして使うことを考慮した改修が望まれる。(隔年開講のため、次回のこの授業は2010年度開講)

今年(2009年)、体育館の改修がようやく行われるようで、そのときに少し、照明機材や冷暖房の機材を入れていただいて、鑑賞にも耐え得るような部屋にしていただけたらいいなど、個人的には思っております。

この授業は、次回は2010年度開講予定です。2010年度の実演授業は、2008年度にあまり取り上げることができなかったコンテンポラリーダンスを取り上げたいと考えています。ダンスの実演とダンサーによるアフタートークという構成を考えています。というのも、舞踊教育学コースの卒業生は、モダンダンスやコンテンポラリーダンスのダンサーとして活動している人が多いからです。実際、コンクールで賞を取ったり海外公演を行ったりと非常に活躍もしています。しかし、日本で芸術家が生きていくのは簡単なことではありません。ですので、こういった授業の場で、少しでもバックアップしてあげることができないだろうかということを考えています。謝金も出るということが分かりましたので、経済的なバックアップにもなりますし、学生にとっても非常にいい経験になると思います。また、ホームページなどで「文理融合リベラルアーツ科目紹介」のように授業を紹介していますので、そのような形でも、卒業生の名前が紹介されれば、大学側のバックアップによる宣伝にもなると思います。

2010年度の実演授業案

- 今年度は、モダンダンス(コンテンポラリーダンス)を授業で取り上げることができなかったため、2010年度は、舞踊教育学コース卒業生(修了生)の、「売り出し中」のモダン(コンテンポラリー)ダンサーを実演者として招聘し、作品の実演とアフタートークを行いたい。(体育館で、2~3回の開催を希望)
- 舞踊のコンペティションで大きな賞を取りながらも、なかなか上演の機会が得られない卒業生のダンサーたちが多くいる。大学側が卒業生のバックアップを行い、LA授業の一環として彼女らの活動を授業紹介のホームページなどで紹介すれば、大学側と卒業生側の双方にとって大きな利益が得られると思う。

以上、ゼミの院生のみなさんや卒業生のみなさんのおかげで今年度の授業を無事終えられたことに感謝して報告を終わりたいとおもいます。

